訳詩

ひき離された愛

作　アヒム・フォン・アルニム　訳　安部孝作

愛らしく麗しいこどもがふたり
愛らしく麗しいこどもがふたり、
ふたりは深く愛しあっていた、
ひとりはまたひとりへと冬には
歌を贈って過ごしていた、
滝のこちらとあちら
重なり合う響きをいつでも耳にするだろう。

冬は橋をいくつも渡した、
ふたりは寄り添った、
そしてふたりは喜びに酔い
橋はもう永遠のものだと思った、
滝のこちらとあちら
両親は離れて谷間に住んでいた。

春は来た、
氷はいまにも溶けそうだ、
だからふたりは憂いていた、
ぬるい風が吹いた、
滝のこちらとあちら
うなりたける小川がどっと流れた。

明るく耀く弧がなにになろう――
それで滝はひとを魅了し、
それはふたりに愛をこめて育てられ
はじめて彩に飾られるのだけれども――
滝のこちらとあちら
ふたりが離れて谷間で歎くのが聞こえた。

鳥たちは飛び越えていった、
こどもたちは悲しんでいた、
そしてひとりで満足せねばならない
互いに遠くから見つめ合うしかなかったのだ、
滝のこちらとあちら
ツバメたちは大きく啼いて飛び交っていた。

ふたりは歌によって一緒になって、
――鳥の雛たちのように、
天国のような春を過ごしたいと思った、
ひき離すというのはむごたらしい、
滝のこちらとあちら
ふたりはとうとう最後に見つめ合った。

少年はめでたくも一人前に
小さな制服をさずかった、
少女は絹の小さなワンピースをもらった、
そうして学校が始まった、
滝のこちらとあちら
鐘が鳴るとふたりは修道院へ向かった。

ふたりは長らく再会することなく、
もはや面影をなくしていた、
少女は豊かな體にコルセットを締め、
少年はもう修道僧なのだろうか、
滝のこちらとあちら
ふたりは来た――　谷間で呼び合った――

少女は高い声で呼んだ、
少年は低い声で歌った、
それでもふたりはすぐにわかった――
それはみなが家で眠るころのこと、
滝のこちらとあちら
耀く月下に魚はみな飛び跳ねた。

夜の清涼にうっとりした、
ふたりは川に冷まされた、
ふたりは魚のようには泳げない、
それでもそれでも口づけを求めあった、
滝のこちらとあちら
渦はたけり狂ってふたりを遠くさらった。

両親は歌を耳にした
そして山腹の家から眼にした、
二羽の白鳥が綺羅星のなか身をよじり
滝の重吹きへ浮かばんとするのを、
滝のこちらとあちら
親ふたりは大きく響く木霊を聞いた。

白鳥たちは絶唱した
ふたりの最期の　最上の歌を――
しかして白く耀き靉靆たり、
天使たちが見下ろしていた、
滝のこちらとあちら
甘い響きが花冠の如く漂い流れた。

月が眺められる　滝の
底から高く上がり、
夜は花々の鎖をひきあげ
響きあうふたりを掬う、
滝のこちらとあちら
いまにいたるところ　涙より緑が萌える。

〈典拠〉Achim von Arnim. Werke in sechs Bänden, Bd. 5. Deutscher Klassiker-Verlag: 1994, S. 703–706.

解題、あるいは短い批評

安部孝作

夜闇に響く鈴音ように愛らしく美しく、不吉なこの詩は、ドイツ・ロマン派の詩人、アヒム・フォン・アルニム(1781-1831)の手による。一八〇九年に発表された長編小説『ドローレス伯爵夫人の貧と富と罪と贖い』で間奏されるこの詩のモチーフは、実に、近親相姦だ。声として現れるふたりの玉なるこどもは互いに無自覚に愛し合い、その歌の響きは調和して重なる。ふたりを同じ血の許に産出した自然はまだこのふたりの純粋な愛に安らいでいる。その愛はまだ互いを分離する性という法に統治されておらず、むしろ、別れて暮らす両親によって毀たれた情緒的家庭の紐帯を保つような、――つまりもう一つの家という道徳、あるいは法に統治された――愛のままだ。そうして冬、白んだ谷間に氷の橋が架かることでこのふたりは逢瀬する。冬は生命の枯死する季節であり、凍てつく寒さは愛に相応しくないかもしれない。しかし二人を分かつ滝の力を眠らせるのもまた冬なのだ。それにしても、冬に宿る愛は、どこか死を思わせないだろうか？　必ず溶けてしまう、ふたりを結ぶ氷の橋が、この愛は白く耀く仮象でしかないのだと思わせる。それはまた、春の訪れが虹をふたりに――実体の無い橋としてとってかわり――渡したときにもそうなのだ。ここでは白く耀く仮象は、鮮やかな色彩を帯びる。それは未分化であるがゆえにふたりを隔てなかった美から、分化し、隔たることで現れる美であり、確固とした物質と光学現象という根本的な強度が異なる。ゆえにふたりの憂いはどこか甘美で、激しさを増す流れは自然の力、情熱を醒まさせた。多様な生命の色彩、虹の色彩が、ふたりの愛の豊かさによって紡がれる歌の色彩と重なる。そしてその美しさがなおの事ふたりの嘆きと互換的なのだ。こどもは自然そのものかのようでありながら、その未成熟が故に官能的でなく、肉体の喜び、駆使を、ツバメや魚たちとは違って享受することはできず、分け隔てる谷を越えていく術もまた、これら生き物と異なりもたない。

やがて成長する。滝のこちらとあちらで違う学校に通い、家を出ることを覚える。ふたりを支配する法は、より大きな世界のものと取って代わり、ふたりの身体も意識もまた、家の支配――血縁の類似性――から解放されながら変態していく。しかし性徴を了えるころ、ふたりは喚び起こされてしまう。コルセットと修道服というより強力な、ふたりを性的に分け隔て、孤立させる抑圧の道具(それらは思春期における性的欲望の誕生を認めがたい矯正器具なのだ)が備わった時、ふたりはそれを拒み、解くようにして滝で落ち合う。ふたりは道徳から脱け出て、恋愛に身を任せた。この時、ふたりは気付かないはずがない。自分たちが離れていた両親の子供であり、道徳的に愛することが禁じられ、その愛が抑圧されてきたことを。しかし再び覚醒したこの愛は、何年もの四季の螺旋をまるで縦に――滝のように――流れ落ちて幼少期の冬から青年の春へと突破しようとし、性欲＝タナトスを成就しようとする。それが激しい渦――引き離し、接近するというせめぎ合い――を生じさせ、予測できる死を引き寄せるように引き攫われ、流される。そして――雛のように歌っていた――ふたり

は白鳥と化し、羽根を広げ、迎えに下りる天使とともに、天へ昇る。重吹きと綺羅星とが重なる境界面を対称面として、ふたりは沈み、昇る。逸脱してしまい、響きの乱れるこの世の法から逃れ、ふたりがまた調和する法の許へと転生する。まさに恋愛はひとつの通過儀礼だった。多彩な光からまた白光が――地、宙、天と上昇しつつ――蘇る＝孵化する過程なのだ。ここに白い芋虫から彩なる絹が生まれ、また白い蛾の誕生を思い浮かべることも可能だ。そしてそれは、同時に死に他ならない。ふたりの愛は涙として地に注がれ、豊穣をもたらすこととなる。冬の終わりにはふたりの犠牲が必要であったかのように――。というのも、家庭の支配を破り自然に呑まれたこのふたりに対し、現世に生きる両親の、ふたりの愛をひき離したこの道徳は、自然を統治するものであり、情緒的家庭にありながら離別して苦と思わない親たちの心情の空白を、――つまり現生の冬の不毛を、更にこのふたりで購わねばならないからだ。

このことから、明らかにこの時期に子どもというものが初めから大人と截然と存在し、あらゆる分化、欲望の指示、抑圧という法から解放され、それゆえに家父長的権力に言われるがままに贄として捌かれる＝解剖、あるいは身体、身体性を分析の俎上に乗せられる。この肉体内部における多様性の発見は、感情の居所を定めがたくした。それは生気だろうか？　あるいは磁気だろうか？　新たな器官だろうか？　脳だろうか？　分子生物学の現在に至るまで疑義が提示され続けるこの問題は、子どもという、感情的にも肉体的にもずれのない、相互に一致した、全体感の所有者をけばけばしくも作り出すことになる。子どもはまさにアダムもエバも無花果の葉を必要としない黄金郷であり、また死してこそ千年王国をもたらす黙示録的世界の象徴となる。子どもはこの世の恵みのため、もはや殺されなければならない。この破壊衝動が性的な装置の濫用が目立ったヴィルヘルム終焉からナチ下工業経済都市ベルリンにかけて発生したのは偶然ではないかのようだ。それがさらに十七世紀、十八世紀の家と道徳、調和的教養を主張したドイツ啓蒙主義、カントの未成年の比喩に代表される子どものもう一面がまた重ねられると、一層不合理主義と言うのが啓蒙や道徳とは切り離された問題であり、むしろ啓蒙の内部に通路があったと考えることができる。

そしてこの詩における近親相姦の問題は血縁と結婚、近親相姦自他を禁止する原理である贈与、あるいは経済に裏書されていることがわかる。つまり他の血族と結婚することは国民 Nation、あるいは民族 Volk の概念に回収された人種差別において忌み嫌われる一方で、明らかに他の血族との結婚が経済のシステムに織り込まれていたわけで、少なくとも結婚＝家庭の形成が経済共同体の形成に他ならないシステムにおいては判然としていたので、このジレンマが深刻となる。転換すると、この詩が書かれたのはナポレオン戦争時であり、神聖ローマ帝国は滅んだのでドイツがまさに諸領邦に分離して存在していた。ナショナリズムが盛んに喧伝される中で、一体どこに足元を定めればよいのかが不明確な中、血族の意識は国民意識と共に膨張し、他の血族を定める境界線が乱れた。当時の社会が血縁・地縁を基本にした民衆と経済・社交的なブルジョワジー・貴族に曖昧に分かれていた、というのはよく聞くが、むしろ縦の層よりも横の広がりに脅威を感じていたのだ。敵と味方がわからない状況は、やはり

強力な敵の像を政治的なものが作り出す。その中で「近親相姦」というのは禁忌であり続けただろうか？　この詩で特徴的な大人と子どもの枠組みが縦の層を示すとすれば、土地と血族の古さに根拠を持つフランス的貴族（ユンカー）の経済的合理性、統治上の合理性、並びに膨張意識・国境意識といった要素のハイブリッドが、まさに民衆の意識の混乱へと変じさせる。そしてこの子どもは死んでしまうのだ。それは死への欲動であると同時に民衆の複雑で、しばしば言語化に隠蔽された、あるいは過度に強調される、時に性的な代償を用いながら掻き立てられる、捉えがたい感情に他ならない。

「民話や神話のキャラクターや、夢、幻視、夢遊病、メスメリズム※などの当時流行の深層心理学的なものを駆使した文学的な仕掛け」を時代批判に用いる彼が、「対岸」のふたりの悲恋を描いたことは、単に彼が「進歩派とも保守的な愛国主義者・反ユダヤ主義者とも、プロテスタントともカトリックとも」いえない立場であったことを反映させている。この詩においてもあらわれている言葉遣いに影響を与えている、四年前一八〇五年にクレメンス・ブレンターノとともに編纂した『少年の魔法の角笛』にある民謡採集が、彼を文化的な地下茎を掘り起こした愛国者のようにも見せる。とはいえ、その歌謡には、グリムの採集した民話と同様、フランスや東方との交流を証立てるものも多く存在していた。さらに彼はフランス革命を肯定するし、その限りにおいてナポレオンを「裏切り」と見做した。たとえばこの詩が少年と少女に留め、女性性も男性性も脱ぎ捨てさせたところには、反って性別分業と男性性の優越を前面に打ち出したナポレオン法典とは真っ向から対立する。覇権的なナポレオンの愛国主義は、結局のところ自由でも平等でもなかった。愛国主義は、――徹底して家父長的であった――啓蒙主義と結託して、――コスモポリタンの蓑を着て――侵略を正当化するものに過ぎなかった。それに反発するプロイセン――彼は当時ベルリンにいた――をはじめとする諸邦の言説の乱れ、分裂は、ビュヒナーの絶望したように、調和的に統一されたり、社会改革的に作用したりすることはないかと感じられたかもしれない。殊に「対岸」の民衆は、一切隔てられる。そういう諸相を批判するように、この詩の端々にある表現は置かれている。この詩のもつ美的な仮象が常に壊れたり幽かであったり、死んだりするというのは、まさにこれら仮象が、批判たるべく仕組まれたからで、さらに毀れ、蘇るからこそ、これら仮象は瞬間より永遠へ至る、既に存在しない美の観念へ昇ることになるのだった。

引用　『ドイツ幻想小説傑作選』（ちくま文庫、二〇一〇年）収録、今泉文子「解説」

※　メスメリズム……ドイツの医師（1734-1815）。宇宙に偏在する磁気と人体に流れる動物磁気を、飲用の鉄や「レンズ」を用いて干渉させ、精神的・身体的治療を行うことを提唱した。その思想にはヘルメス主義の影響もあり、思想・モチーフ的にゲーテやシラー、ホフマンにネルヴァル、あるいはカリオストロ、そしてフロイトらに継承された。フランス革命を主導したマラーも愛好していたように、当時啓蒙されていると思い込む人でさえも影響を免れることはなかった。